

ショパンのスケルツオNo. 1 Op 20についての一考察

山 岸 麗 子

I スケルツオについて

スケルツオ(Scherzo)とはイタリア語で、元来は「冗談」とか「洒落」「戯れ」とかの意味をもつ言葉である。音楽史的には17世紀頃からイタリアの軽快な娯楽的な歌曲に *Scherzi Musicali* というものがみられるようになり、バッハの息子カール・フィリップ・エマヌエルのソナタには、*Allegro Scherzando* (快速そして諧謔的に)ないし *Prest Scherzando* という楽章が発見されている。ハイドンも1781年作の絃楽四重奏曲Op. 33の6曲は、メヌエット楽章がすべてスケルツオにおきかえられている。しかしそれらのスケルツオは、現在我々が考えるようなはっきりした形式も内容も持たなかった。それを個性的な楽曲として、本格的に成長させたのはベートーベンである。ベートーベンはソナタなどの多楽章形式の曲の中でメヌエットのかわりに、同じ3拍子ながらテンポの速い、鋭いリズム的アクセントをもつスケルツオをおくという構成を確立したのであった。その形式は、メヌエットと同じく複合3部形式によるのが普通で、トリオと称する中間部を、主部であるスケルツオと対比させ、急速、軽妙なスケルツオにゆったりしたトリオをはさむことによりよくその形式を整えている。ベートーベンの九つの交響曲を調べてみると、その殆んどがスケルツオ楽章を用いていることがわかる。第一番の第3楽章は、*Minuetto Allegro molto e vivace*の指示があるが、典雅な舞曲であるはずのメヌエットは、このように急速に、又その内容も奔放に男性的である。これは従来の習慣に従ってメヌエットと呼んだままで実質はすでにスケルツオなのである。第二番は*Scherzo Allegro*、第三番は*Scherzo Allegro vivace*とはっきりしたスケルツオの表示がある。第四、第五、第六、第七までの第3楽章は、スケルツオの表示はないが、内容的にはあきらかにスケルツオである。第八番のみ*Tempo di minuetto*となっている。そして第九番は、第2楽章に*molto vivace*のスケルツオをおき、第3楽章に緩徐楽章をおいている。以上のように第八番を除きすべてスケルツオ楽章ということが出来る。ベートーベンにとってはすでに形式的因襲となってしまった貴族男女のサロンの舞踊であるメヌエットはもう不必要であったのであろう。そして自由な野人の諧謔の歌といってよいこの個性的楽想のスケルツオによって素晴らしい傑作を数多く後世に残したのであった。

ソナタなどの多楽章形式の第3楽章、あるいは第2楽章におかれたスケルツオは、大曲の中の一部として、より重要な冒頭楽章(第1楽章)や終楽章(第4楽章)にくらべてゆるやかな抒情的楽章(第2楽章)と同様比較的軽い副次的な意味しかもたないことは否定

出来ない。しかしその首尾両楽章に対しては、まさに対比的な味わうべき楽想の変化の妙をもっていて、その効果的価値は大きいのである。こうした中間楽章としてのメヌエットとスケルツォを考えると、おっとりした18世紀的貴族舞曲より急速なテンポ、そしてリズム的アクセントの面白さとユーモアのきいた又、男性的迫力のあるスケルツォの方がより時代にマッチし、より気分転換の役割を果しているということができよう。

ベートーベン以後にも、例えばシューベルトの長大なハ長調交響曲の第3楽章やメンデルスゾーンの真夏の夜の夢のスケルツォのようにベートーベンの諸作にもひけをとらないスケルツォの名曲も少なくない。そしてこれらの作品は、名称は同じスケルツォでも性格を大分異にし、ベートーベンの作品にみられるような厳しい表情はなく優雅さにみち、軽妙な幻想的性格をもった新しい境地を開くのに成功している。

ショパンも2曲のピアノソナタの第2楽章に今まで述べた用い方でスケルツォを取り入れているが、ショパンはそれとは別にこの同じスケルツォの名称のもとに前代未聞のスケルツォを創造したのであった。それは、軽快なしゃれた小曲ではなく独立した、がっちりとした骨組をもつ堂々たる大曲で真に独創的なショパンの面目躍如たるものがある。ショパンの作品は、前奏曲にせよ練習曲にせよソナタにせよ、いずれもそれらの楽曲名の本来の意味からはみ出した彼独特の心の表現であるものが多いが、中でも4つのスケルツォは彼以前の作曲家のスケルツォの特性を殆んどもたない独創的なものである。音楽評論家ハネカーは、「スケルツォは、ショパンの霊的な記録で、決して唇を通して外にいい表わすことのない魂の告白である。それらによってのみ私達は、真のショパン、奥底のショパンにふれることの出来る」といっている。4曲中、最後の1曲のみ長調でやゝ趣きを異にしているが、いづれもプレストで他の作品に例をみない程荒削りの情熱をそのままぶっつけた深刻な音楽となっている。シューマンは「冗談が黒い着物をきて歩きまわるとしたら、真面目は何を着たらよいのだろうか。」と批評をしているように、主流となるスケルツォの部分は、救い難い絶望、激しい怒り、憂愁、といったものに溢れ、中間部のトリオで甘美なショパンらしいメロディーが表われることがあっても、それが曲想の主流となっているわけではない。まして軽快な明るい戯れなどはどこにもなく、又ショパンの典雅な詩的性格はこゝでは全く影をひそめ、強烈なひびきとほとぼしり出る情熱が作品を支配しているのである。それらはショパンの心の底を最も赤裸々に吐露したもので、ポロネーズのような民族的なものではない、個人的反抗がうかがえるのである。当時の人々にはショパンのこのような烈しい性格、憤怒や絶望感、頑固なまでの自尊心は、彼の優美に彩られた詩的半面程よく理解されず歓迎もされなかった。何故ならば、社交界の寵児として貴婦人達の憧憬を集めていたショパンは、常に絹のマフラーを巻き、白い手袋をはめ非常に物静かで礼儀正しく、何時も優雅な紳士的態度を失わなかったからであろう。

なお、このショパン的なスケルツォの世界はブラームスのスケルツォによって受け継がれている。

II ショパンのスケルツォ第一番について

スケルツォ第一番について

作曲年代	1831～1832	21才
出版	1835	

捧 呈 T. アルブレヒト
 構 成 大3部歌謡形式

I 序 奏	1 — 8 小節
(A) 第一主題の発展	9 — 44 小節 (♩短調)
(B) Aのモチーフによる展開部分	69 — 124 小節 (=長調, ♩長調, ♩短調)
(A) Aの反復	125 — 184 小節
(B) Bの反復	185 — 240 小節
(A) Aの反復	241 — 304 小節
II トリオ風の間奏部	305 — 388 小節 (♩長調)
III = I	389 — 569 小節
IV コーダ	570 — 625 小節

この曲は、1830年のクリスマスイヴに独りでウィーンの聖シュテファン教会を訪れた時、ここで1時間程もの思いにふけっている間にこの楽想が浮んだといわれる。彼の手紙によると、教会へは12時につき巨大な伽藍の下に佇んでいると、心の中に憂愁なハーモニーがあふれ、かつてない程の孤独感におそわれ、それがこの曲に結像した如く書れている。その頃のショパンは、独りウィーンにあって空虚な日々を送っていた。丁度その年の11月29日にロシアに対するポーランドの反乱が起り、共にウィーンに来ていた親友のティトウスは急ぎ祖国にとってかえし軍に加わったのである。ショパンもティトウスと一緒に帰国したかったが、彼は自分が兵役に適さないことを自覚していた。当然のことながら、彼の家族、恋人コンスタンティアや一般同胞への懸念にさいなまれ、自分が何をなすべきかということについての疑惑の念に苦しめられながら、独りウィーンに滞っていたころのことである。このスケルツォは、この時期における彼の精神状態を反映している。

この曲で、ショパンの心をついて出た嵐のような感情の原因は、祖国ポーランドに対する深い愛情、そしてどうにもならない周囲の壁に対する烈しい憤怒、ほとんど自暴自棄といってよい程の絶望感であった。1831年7月遂にポーランドの首都ワルシャワはロシアの手に落ちた。ショパンはウィーンを去り、パリへ向う途中であった。スケルツォの最初のスケッチは、まだウィーンにあった5、6月頃から着手され、パリで補筆され1832年に完成した。僅か21才のショパンは、そんな社会的背景の中に、不朽の名作「エチュード「革命」」を書きあげ、その「革命」に共通するところの多い激情の曲スケルツォ第一番を生み出したのである。

楽想は、非常に大胆な碎けるような2ケの不協和音で開始される。そしてそれに続く焦燥に満ちた旋律は、*Prest con foco* (火のように急速に)の指示通り、火のように荒れ狂い、やがてゆっくりした素朴な中間部の楽想(トリオ)に連なる。主部と見事な対照をなすこのトリオは、ポーランド民謡のクリスマスソング「ねむれ幼きイエズス」の旋律にもとづいているもので、2オクターブにわたる巾広い伴奏に、右手の10度の動きが豊かな夢を描き出し、ショパンの一傑作として認められている。トリオの終り近くこれと重なって、冒頭の2つの激しい不協和音が突入し、再び最初の焦燥に満ちた音楽が復活して、絶叫にも似たクライマックスに到達する。長いコーダの作り方も見事で非常によく纏った

作品である。

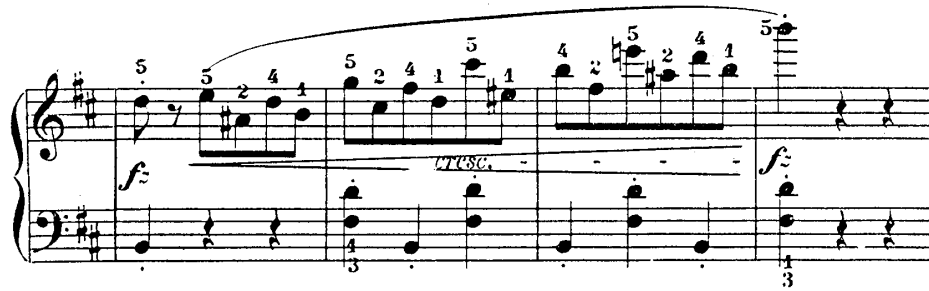
Ⅲ スケルツォ第一番の演奏法

(1) 序 奏

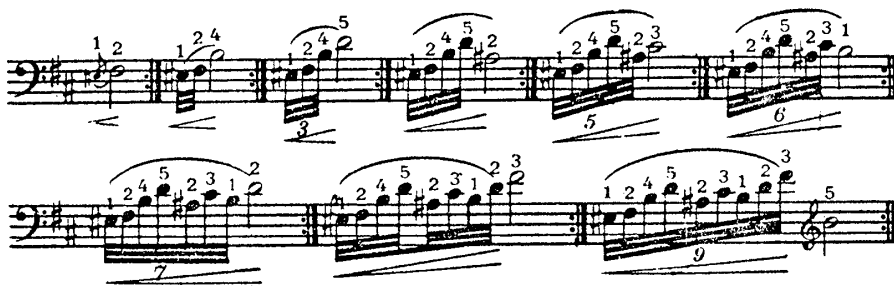
Presto con fuoco. (♩.=120.)

Allegro con foco (♩.=120.)の指示のように1小節を1つに数える急速なテンポでひかれる。冒頭の8小節にわたる7度の2ヶの和音は、決然と向合い短い中断をもってひかれなければならない。不意に驚かせるこの大胆な和音が序奏となって、このドラマティックな強烈な曲の幕は切って落されるのである。この和音は絶対につながるようにひいてはならない。又ともすれば陥りやすいかたい、ごつごつしたぶつけ方にならないよう叩かないで腕全体の重みかけるようにして力強いひびきを出さなければならない。最初の和音をひく直前に、直ちに弦全体に和声的ひびきひろがるように強くペダルを踏み、短い中断をもって、次の和音があたかも決闘をいどむように、二つ同じように並ばなければならない。2番目の和音は、初めのよりやゝ長めの感じがよいと思う。

(2) 第一主題



それに続く16小節全体のニュアンスは、何か神秘的なある一種の包むような雰囲気の中に続くのであるが、右手の旋律的モチーフの各々が強いクレッシェンドをもって、あたかも燃えさかる火のように鮮明に出て来ることが肝要である。技術的には、指の発音を次第に高めてゆきながら、手の重みをそこに加えて行く方法を次のように練習するとよい。



5小節から8小節にかけては次のように練習する。



次の部分 譜面上では次のようになっているが

左記の如く、最初の4分音符を強いスタッカートにし、次の音の頭に、より奔放なアクセントをもってくることにより、嵐のような衝撃を表現する。

このパッセージ（次の4小節まで）は、旋律形がごちゃごちゃに入りこんでいるから、音型にそって手首を上手に使い念入りに練習をつまなければならない。

始めからこの部分全体のリズム的要素は伴奏部分のひき方によってきまるので、左手のスタッカートをはっきりと発音し、リズムのもつ強弱にもとづいて生き生きとしたリズム感のあるひき方を習得することが非常に大切である。

(3) 補助モチーフ

この3つの激しい和音のあとに静かないこいがくる。今までの激しさと対照的に、悲しげな感情をこめて低音の旋律が訴えかけ、riten.されたテンポと共に深い静けさに入ってゆく。

こゝでは、左右の2本の腕だけで対話し、オーケストラの絃の高鳴るひびきを感じさせるよう努力しなければならない。

(4) 第一主題の展開部分

こゝは、初めのモチーフの展開されてゆくところである。このAgitato は激動というほどのものではなく、その前にriten.されたテンポをもとにもどし、sotto voce のデリケートな音に不安な感情をこめ少しずつ湧き出ずる如く、基調の動きの表現に導いてゆくのである。

次にくる下記の演奏のむづかしさは、

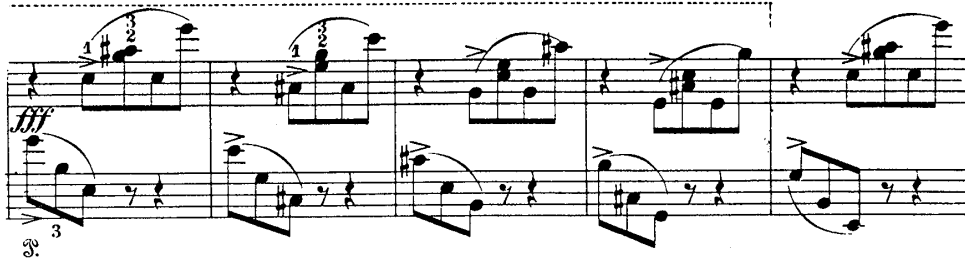


右手のアルペジオの上の音符、第5指でひかれる弱拍部にメロディーが美しく流れてくることである。このcisから始まる高音の旋律に気持ちを入れて十分歌いあげなければならない。それと共に、左手のアクセントに基調をおく基本的リズムがくずれないように注意しなければならない。うっかりすると、このようなところは2拍子の印象を与えるひき方になってしまうので、3拍子を絶対に変えないようにくれぐれも注意が肝要である。(右手のフレーズの頭である1指にアクセントがつかないように)

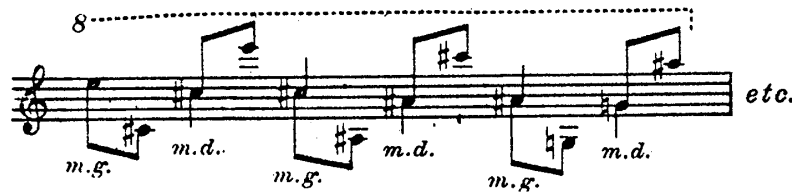


左記の左手の広がった音符をはずさないように次のように練習する。2指又は3指のささえの上で手首を回転してひく。

次の騒がしい挿入部分では、出来るだけエネルギッシュな親指のタッチを必要としている。(各フレーズの頭)



左記のように1指の練習をする。
上から叩くように強いアクセントで。



次に手首の動きを規則的にならすために指の一番離れたポジションを確実に。
etc.



最後に右手の指の1本1本の力をつけるために。

この部分は、ショパンの指定どおり、ペダルを7小節にわたって踏んでいること。

(5) 中間部

この中間部分の天国的なやさしさは、いわゆるスケルツォの熱っぽい衝動とは全く対照的に、遠い思い出にひたるが如く、柔らかい夢みるような情緒に満ちている。おそらく、ショパンは、一つの曲の中にこのような対照的な感情をこめることの出来た第一人者の作曲家であろうと思う。

ポーランド民謡のクリスマスソング「ねむれ幼きイエズス」の旋律にもとづいたといわれるこの部分は、遠くから祖国を思う心を、かなり明白に表わしている。技術的には、音色に関してしかむずかしさはないが、左手の2オクターブにわたる伴奏の音色と、右手の旋律音および10度にわたる旋律を包んだ柔らかいニュアンスとそれぞれのひびきをよく聴き合って、美しいハーモニーをかもし出さなくてはならない。ソフトペダルを使用し、伴奏部分は指を平らにして鍵盤に指をつけた状態でなでるようにひき、旋律音(テヌートの

ついたDisの音)は、指先に気持を入れてぐっと押すように、そして10度上の音はあたたかも鐘のひびきの如く旋律音を包むようにひかなければならない。

Molto più lento. (♩=108.)

sotto voce e ben legato

The first system of the musical score consists of two staves. The upper staff is in treble clef and contains a melodic line with several measures. Above the notes are fingerings: '1' above the first two notes, '12' above the third note, '1' above the fourth note, and '2' above the fifth note. The lower staff is in bass clef and contains a bass line with several measures. Below the notes are fingerings: '2' below the first note, and '3' below the second, third, fourth, fifth, sixth, and seventh notes. The music is marked with a tempo of 108 beats per minute and the instruction 'sotto voce e ben legato'.

メロディーを出そうとしたためのアクセントのつけ過ぎや大げさな表情は、ショパンの発想に反し、この夢みるような印象をなくしてしまうのでよく注意しなければならない。

The second system of the musical score consists of two staves. The upper staff is in treble clef and contains a melodic line with several measures. Above the notes are fingerings: '5' above the first note, '2' above the second note, '2' above the third note, '3' above the fourth note, '5' above the fifth note, '4' above the sixth note, '3' above the seventh note, '454' above the eighth note, '3' above the ninth note, and '2' above the tenth note. The lower staff is in bass clef and contains a bass line with several measures. Below the notes are fingerings: '3' below the first note, '3' below the second note, '2' below the third note, '3' below the fourth note, '2' below the fifth note, '3' below the sixth note, and '2' below the seventh note. The music is marked with the instruction 'a tempo, poco a poco cresc.' and asterisks are placed below the bass line notes.

このhの音から旋律の線ははっきりした輪郭を表わし、より主観的に烈しさをも加えてこの部分のピークとなる。この装飾音は、速くひいてはならない。飾りというよりもっと表情的なものであるから細かい動きがおろそかにされないよう次のようにひくとよいであろう。

The third system of the musical score consists of a single staff in treble clef. It contains a melodic line with several measures. The music is marked with a tempo of 108 beats per minute and the instruction 'a tempo, poco a poco cresc.'.

326小節の左手は、かなりの版、特に初版から写したもののなかでは

The fourth system of the musical score consists of a single staff in bass clef. It contains a bass line with several measures. The music is marked with a tempo of 108 beats per minute and the instruction 'a tempo, poco a poco cresc.'.

となっているが、これはハーモニーの細部にわたって行き届いたショパンの細かい心づかいに反している。こゝは多分書き間違い、あるいは改定版中にはからずも表われ

た思い違いでしかないと思う。



このようにひくべきであるとコルトーは云っている。



上記のようなものも誤りである。

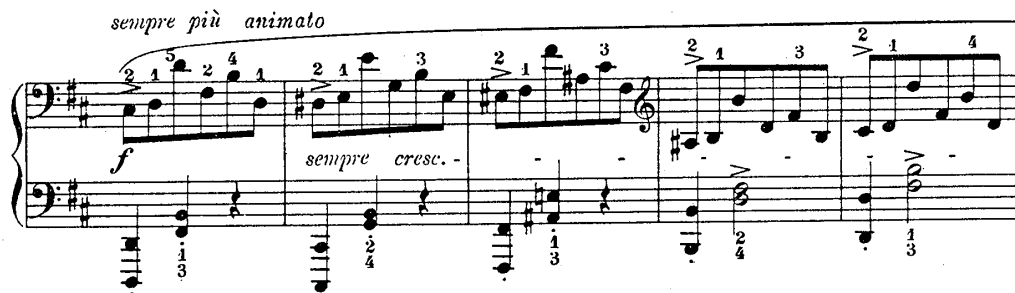
また、375小節の左手の2番目の音(Gis)も前楽節と同じく



(Ais)となっている譜があるがこれも誤りである。

中間部の終り近くただようような不確かな、ともすれば風化してしまいそうなくり返えしの中で、嵐の閃光のように突入する不協和音。さらに尾をひく余韻にもう一撃。冒頭の2つの和音を思い出して頂きたい。そして、さおさめやらぬ夢にただよいつゝ……ふと我にかえったようにはじめのスケルツォの部分再現されるのである。

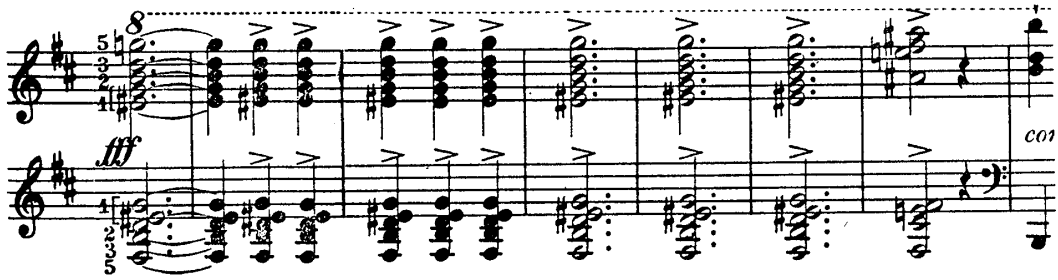
(6) コーダ



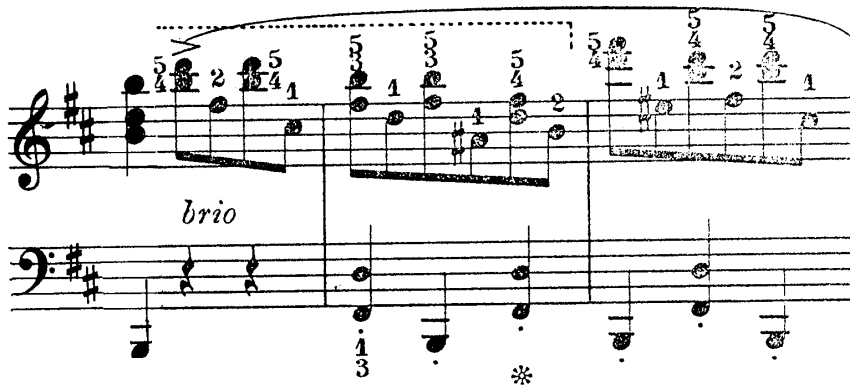
旋律的な歩みをはじめの3小節間だけ次のような感じで



それに続く8小節間は逆に次のリズムできざまれる。

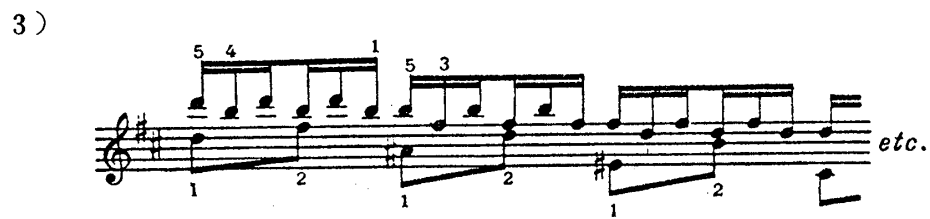


不吉な半狂乱的な、はたまた歓喜の絶頂のような甲高い和音を重ねてゆくこの熱狂的な感じを恐れずにしっかりと表現しなければならない。上半身の重みを指先きにかけるようにしてひく。

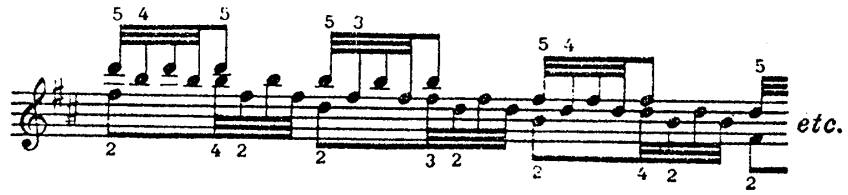


上記の如く3度と4度の連続で雨がなぐりつけるようなひびきを効果的に出すために大胆なアクセントのつけかたが、情熱的な終曲部に輝きのある強さを出すことが出来る。

弱い第4指、第5指の技術を次のようにして練習するとよい。

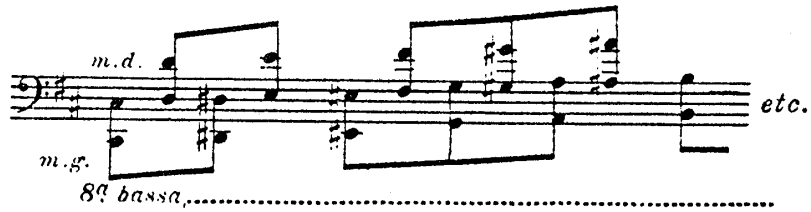


4)



その最後は、4 オクターヴにもわたる急ピッチの半音階の上昇で終る。

リストはこの部分を下記の如く、両手を使ってオクターヴでひく方法をとった。



演奏効果を高めるためには、この方が強烈でより効果的であるが、ショパンの楽曲では、一音たりとも勝手に変更することは冒瀆であると考えられる程、彼の音楽は、推敲に推敲を重ねて完成されたものであるので、いわゆる巨匠でないかぎり原曲のまゝひかれるべきであると思う。

参 考 資 料

ALFRED CORTOT CHOPIN SCHRZOS Op.20 EDITIONS
SALABERT